埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

国際関係におけるリアリズムと実存主義の一考察：階級社会と不条理に着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): ヴィクトリア時代, リアリズム, 20世紀, 実存主義, 不条理 キーワード (En): Victorian era, realism, 20th century, existentialism, absurdity 作成者: 五十嵐, 淳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/2000065

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

国際関係におけるリアリズムと実存主義の一考察
― 階級社会と不条理に着目して ―

A Study of Realism and Existentialism from the Viewpoint of International Relations
Focusing on Class Society and Absurdity

五十嵐　淳　子
IGARASHI, Junko

本研究では、国際関係において階級社会と不条理に視点を置き、1848年に発刊されたエミリー・ブロンテ『嵐が丘』と1942年の第二次世界大戦下に発刊されたカミュの『異邦人』の作品に着目する。ヴィクトリア時代のリアリズムの全盛期において、エミリー・ブロンテは『嵐が丘』の作品を通じて何を伝えたかったのか、発刊した意義はどのようなことがあるのかを考察する。また、カミュの『異邦人』においては、20世紀の戦争と革命の激動の時代の中で、実存主義と表される世界における「不条理」に対して何を伝えたかったのか、どのような意義があったのかを考察する。

『嵐が丘』は愛情と復讐の中で、人間の卑劣な汚い部分も多く見られる小説であり、人々に受け入れ難い場面が多々ある。それぞれの登場人物からは人間のエゴが描かれており、復讐に執着する場面では震え上がる怖さがあり、想像を絶するような世代を超えた復讐劇が繰り広げられる部分が多く、解釈に戸惑うこともある。その一方で悲劇の恋愛とも読み取れる場面もある。さらに、人間の普遍的な部分と当時の時代背景を反映した部分が入り交じっていることも読み取れる。ヴィクトリア朝文学において、『嵐が丘』はリアリズムを象徴する意義があったと考える。カミュの『異邦人』が出版された1942年は第二次世界大戦下にあり、罪のない人々が殺され、何が善で何が悪かがわからなくなっている状況から、まさに「不条理」が避けられない世界であったことがわかる。国際社会において20世紀は二つの世界大戦が勃発し、常に苦悩や不安に晒されていた時代でもあったが、自分の死を直面せざるを得ない状況に置かれても、幸福を感じることができること、そして、人間はどんなに絶望に駆られていても、生きるという希望もあることをカミュは『異邦人』の物語を通して、人々に伝えたかったのではないかと考える。

1．はじめに

ヴィクトリア朝時代の文学について、石塚（2014）は「ヴィクトリア時代は散文の時代であり、とりわけ文学史上初めての「小説の時代」だった。1837年から1901年の間に出版された小説は６万点に及ぶといわれている。」と言及している[1)]。エミリー・ブロンテが著

キーワード：ヴィクトリア時代、リアリズム、20世紀、実存主義、不条理
Keywords　：Victorian era, realism, 20th century, existentialism, absurdity

書『嵐が丘』を出版した1848年は、ヴィクトリア朝時代であり、小説がエンターテイメントであった時代である。

関（2001）は、「経済的に余裕ができるにつれ、家庭での団欒の時間もふえ、窓は広く明るく、冬には暖炉が燃えさかり、人びとは小説を読むという楽しみを初めて発見したのである。科学技術の進歩にともない、出版業界も恩恵をこうむり、製紙工業も発展し、海外から輸入される木材で紙が大量に、しかも安価で作られるようになった。」と主張している[2)]。ヴィクトリア朝時代は、産業革命の時代であり、経済が発展したため、紙が安価で量産できるようになったことや人々に余暇を楽しむ余裕が生まれた背景から、労働階級を含め市民階級の識字率も上昇し、どの階級でも小説を読むことができる時代であったことがわかる。

一方で20世紀は戦争と革命の時代であった。第一次世界大戦が始まる19世紀末から1914年まで約20年が良き時代であり「ベル・エポック」と言われた時代であり、安定した軌道に乗ったかに見えた。しかし、そのような良き時代は長くは続かず、植民地獲得をめぐる争いから緊張が高まり、1914年に第一次世界大戦が勃発した。

国際社会において第一次世界大戦ではフランスは戦勝国にはなったが、この戦争によって国土は荒廃し、大量の死者を出した。横山（2021）は、「最新兵器による大量殺人を目のあたりにした復員兵たちは、廃無感とともに、仲間の多くを無残な死に追いやった世代に対する断絶の意識を強めた。」と言及している[3)]。第一次世界大戦後は、戦勝と復興による浮かれた雰囲気は長く続かず、ヨーロッパの影響力は低下し、財政危機やインフレと共に国民全体が深い喪失感や失意に包まれた。

1939年に第二次世界大戦が勃発し、人々の幻滅は深まりさらに激化した。饗庭(2020)は、「文学においてもまた、美学的関心よりまして時代に生きる人間の不安や苦悩、その悲喜劇的な認識が主題となった。」と示唆している[4)]。フランス文学の作家も社会の混乱や人間性の危機に直面させられ、文学は逆境と危機の20世紀を生き延びなければならなかった。

本研究では、国際社会におけるイギリスのリアリズムとフランスの実存主義に視点を置き、それぞれの国際関係や時代背景を踏まえ、19世紀のイギリス文学及び20世紀のフランス文学の文献を概観する。具体的な作品としては、1848年に発刊されたエミリー・ブロンテ『嵐が丘』と1942年の第二次世界大戦下に発刊されたカミュの『異邦人』の作品に着目する。

そして、ヴィクトリア時代のリアリズムの全盛期において、エミリー・ブロンテは『嵐が丘』の作品を通じて何を伝えたかったのか、発刊した意義はどのようなことがあるのかを考察する。また、カミュの『異邦人』においては、20世紀の戦争と革命の激動の時代の中で、実存主義表される世界における「不条理」に対して何を伝えたかったのか、どのような意義があったのかを考察する。

2．リアリズムとヴィクトリア朝文学

石塚（2014）は、「『リアリズム』を重視したヴィクトリア時代の小説は、同時代の社会の関心・欲望・不安を積極的に題材として取り上げた。当時の小説は、多様な思想や意見を伝える重要なメディアであった。」と言及している[5)]。そして、ヴィクトリア時代の小説は、リアリズム（Realism）の全盛期だと

示唆している[6)]。鴻巣(2001)は、「わたしは『嵐が丘』は人間のエゴと心理をありのままにリアルに描いた、心のリアリズム小説だと思っている。」と主張している[7)]。西脇（1977）は、「ヴィクトリア朝時代には、Evangelicalism（福音主義）という宗教的な社会運動があった、聖書の福音、快楽を否定する禁欲主義、謹厳な生活、勤勉努力、宗教心（Pietism）等を説いて、これが当時の国民生活に非常に影響を与えた。これが極端になり偏狭な人生観となり、Victorianismというpuritanismを形成することになった。」と言及している[8)]。

『嵐が丘』は愛情と復讐の中で、人間の卑劣な汚い部分も多く見られる小説であり、人々に受け入れ難い場面が多々ある。それぞれの登場人物からは人間のエゴが描かれており、復讐に執着する場面では震え上がる怖さがあり、想像を絶するような世代を超えた復讐劇が繰り広げられる部分が多く、解釈に戸惑うこともある。その一方で悲劇の恋愛とも読み取れる場面もある。さらに、人間の普遍的な部分と当時の時代背景を反映した部分が入り交じっていることも読み取れる。ヴィクトリア朝文学において、『嵐が丘』はリアリズムを象徴する意義があったと考える。

神山（2020）は、「1870年頃までのヴィクトリア朝前期は、イギリスが商工業国としてかつてない反映をみた活力あふれる上昇の時代である。また、一方、この時代は貧富の差が一層広がり、社会的矛盾があらわになって、広範囲にわたる革新運動が起こった時代でもあった。」とヴィクトリア朝時代を記している[9)]。『嵐が丘』の物語は、絶えず貧富の差や階級の差が描かれている。イギリスが産業革命により経済発展を遂げて富をもたらす一方で、労働階級の生活は貧しさから抜け出すことができずに、貧富の格差が広がっていく現実があった。『嵐が丘』の小説は、ヴィクトリア朝時代の階級社会や貧富の格差の現実を反映しており、ヴィクトリア朝文学においての意義の一つとして考えられると言えるだろう。

3．『嵐が丘』の考察

エミリー・ブロンテの作品である『嵐が丘』は「アーンショウ家」と「リントン家」が複雑に絡み合った生き様を背景にした小説である。アーンショウ家には、３人の子どもがおり、兄のヒンドリーと妹のキャサリン、血の繋がりがない弟のヒースクリフがいた。弟のヒースクリフは貧困の中にいた孤児であり、アーンショウ家に引き取られた子どもである。

『嵐が丘』の登場人物の中心人物であるヒースクリフは貧困の中で育ち、裕福な家庭であるアーンショウ家にもらわれた子どもであった。しかし、アーンショウ家の家主である父親は実子であるヒンドリーよりも、捨子であったヒースクリフを可愛がったことから、兄のヒンドリーは、父から愛情を注がれていないことを卑下し、ヒースクリフを妬むようになっていく。父が亡き後、アーンショウ家の家主となったヒンドリーは奴隷のようにヒースクリフを扱うようになった。裕福なアーンショウ家の中でも奴隷扱いされることとなる。

また、貧富の格差から生まれる不条理は憎しみだけから生まれるわけではないことも物語から鑑みることができる。ヒースクリフとキャサリンの関係性は良好で、お互いにいつしか惹かれ合うようになっていた。乳母のネリーには秘密の相談として、エドガー・リントンのプロポーズを受けたことをどう思うか

を相談する。ヒースクリフはキャサリンの話を陰で聞いており、「ヒースクリフと結婚したら落ちぶれることになる」という言葉を聞き、キャサリンが結婚相手としてエドガーを選んだことに大きなショックを受ける。キャサリンは「人間の魂がなにで出来ていようと、ヒースクリフとわたしの魂はおなじもの。リントンの魂とは、稲妻が月明かりと違うぐらい、穂脳が氷と違うぐらい、かけ離れているの」と乳母のネリーに話している[10)]。

しかし、ヒースクリフはキャサリンの話を最後まで聞くこともなく、その場からいなくなってしまう。キャサリンはヒースクリフに気持ちがありながら、兄のヒンドリーがヒースクリフを奴隷のように扱っていることを気にしており、結局は、お金持ちでハンサムのエドガー・リントンのプロポーズを受けることとなる。ここから、ヒースクリフの想像を絶する復讐劇が始まっていくのである。

ヒースクリフとキャサリンの関係性を見ていくと、本来は相思相愛であったと考えられるが現実問題としては、キャサリンは貧困を恐れ、裕福な上流階級のエドガー・リントンを結婚相手に選んだことはヒースクリフを裏切る行為に繋がってしまう。キャサリンの心と現実の間に矛盾があったことは、まさしくヴィクトリア朝時代を反映していると考える。ヴィクトリア朝時代の目覚ましい経済発展の中で、女性が男性に経済的な依存をしなければ上流階級層を維持することができない現状があったことを伝えていることに意義があると考える。また、実際に心で繋がっていた相手からの裏切り行為に傷つきショックを受けることは、どの人間にも生じる感情であり、その時代を反映するだけでなく、普遍的なことも伝えていることにも意義があるのではないかと考える。

ヒースクリフの復讐は次の世代にも続いていくこととなる。ヒースクリフが姿を消してから、見違えるような立派な姿になって、キャサリンの前に姿を現す。キャサリンは大喜びであり、ヒースクリフは復讐のために戻ってきたとは思いもよらなかった。キャサリンとエドガーとの間に女児が生まれるが、ヒースクリフへの愛を抱きながら、エドガーとの婚姻生活に疲弊し、女児誕生後すぐに亡くなる。

一方で、ヒースクリフは復讐のために、エドガーの妹のイザベラと結婚する。ヒースクリフは更なる復讐の手段として、キャサリンとエドガーの子どものキャサリン・リントンとヒースクリフとイザベラの子どものリントン・ヒースクリフを結婚させ、ヒースクリフはリントン家とアーンショウ家の両方の家主として君臨するようになる。

ヒースクリフは上流階級の家庭にもらわれたが、兄のヒンドリーに奴隷の扱いを受けて、勉強したくても勉強できる環境に身を置くことは叶わなかった。そのため、兄のヒンドリーの子どものヘアトンに教育を受けさせなかった。ヒースクリフの復讐は、キャサリンの裏切り行為をきっかけにして、愛情が憎しみに変化を遂げたこともあるが、復讐の感情を抑えることは倫理的に物事を考えられるかどうかであり、今までに家庭や学校で受けた教育が関係していると考える。

もし、ヒースクリフが教育を受けていたら、ここまでの復讐劇は存在しなかったのではないかと考える。ヴィクトリア朝時代は経済が発展し、庶民の識字率も上り、市民階級でも小説を読むことができた時代である。『嵐が丘』の物語の中で、ヘアトンが字を読めないことがわかる場面があり、上流階級に生まれ

たとしても教育を受けさせなければ、ヘアトンのようになることを暗に示していることは、階級に関係なく教育の重要性を伝えていることにも意義があると考える。

４．実存主義と不条理

第二次世界大戦の中、ドイツ軍占領下でフランス文化と人間の尊厳を擁護しようとする文学者の抵抗運動が展開され、レジスタンス文学として、文学がもつ社会的な意味が大きくなっていき、サルトルやカミュを中心とする不条理に対する意識を出発点とする実存主義文学が生まれた。

饗庭（2020）は、「1930年代の後半から第２次世界大戦にかけて、ファシズム、スペイン戦争、独ソ不可侵条約の締結、大戦下における死や拷問と飢餓、強制収容所におけるユダヤ人の大量虐殺等は、あらためて人間存在とは何か、それが作り出す社会とは何か、という問いを生んだ。戦争による社会構造の激変が、生の価値体系をくずしたことはいうまでもない。」と言及している[11]。加えて、「そこから『不条理』にむかって闘う行動への志向が生れ、孤独のなかに、脱自と自己創造を求めるサルトルやカミュの文学があらわれた。」と示唆している[12]。カミュの『異邦人』が出版された1942年は第二次世界大戦下にあり、罪のない人々が殺され、何が善で何が悪かがわからなくなっている状況から、まさに「不条理」が避けられない世界であったことがわかる。

５．『異邦人』の考察

カミュの作品である『異邦人』の小説の物語は「きょう、ママンが死んだ」という冒頭から始まる[13]。主人公であるムルソーはフランス人の平凡な青年で、ある日、母親がいた養老院から亡くなった報告を受け、葬儀に出発する。母親を亡くしても悲しむ様子は見られず、葬儀の翌日に女性と戯れた。その後、様々な偶然が重なったことにより、ムルソーは海辺で仲間と争ったアラブ人を射殺してしまう。ムルソーは逮捕され、牢獄され裁判となる。

物語では、「留置されて最初のうち、それでも、一番つらかったことは、私が自由人の考え方をしていたことだった。例えば、浜へ出て、海へ降りてゆきたいという欲望にとらわれた。足元の草に寄せてくる磯波のひびき、からだを水にひたす感触、水のなかでの解放感－こうしたものを思い浮かべると、急に、この監獄の壁がどれほどせせこましいかを、感じた。」とムルソーの状況が描かれている[14]。この部分からは、ムルソーと戦下の状況を重ね合わせることができると考える。戦争で自由な思想や行動がとれない状況に追いやられ、罪のない人々が殺される中で、波の響きや水の感触など、海を感じる瞬間でさえも愛おしく、どれだけ貴重なことなのが読み取れる。今までは何気ない日常にあったものが一転して手に入らない日常になってしまう状況がどれほど異常で「不条理」なことかを考えさせられる場面であると考える。

ムルソーは検事や裁判長にも不可解な発言を繰り返すが、他人にとっては不可解な発言でも、ムルソーにとっては、自分の真実を話しているため、自分の行為は弁護する気はなく、自分の行動はひとつの事実でしかないことを発言する。ムルソーが裁判所から護送車に乗る時だけ、外の空気を吸うことができた。その時の場面として「裁判所を出て、車に乗るとき、ほんの一瞬、私は夏の夕べのかおり

と色とを感じた。護送車の薄闇のなかで、私の愛する一つの街の、また、時折り私が楽しんだひとときの、ありとあらゆる親しい物音を、まるで自分の疲労の底からわき出してくるように、一つ一つ味わった。すでにやわらいだ大気のなかの、新聞売りの叫び。辻公園のなかの最後の鳥たち。サンドイッチ売りの叫び声。街の高みの曲がり角での、電車のきしみ。港の上に夜がおりる前の、あの空のざわめき。－こうしてすべてが、私のために、盲人の道案内のようなものを、つくりなしていた。－それは刑務所に入る以前、私のよく知っていたものだった。そうだ、ずっと久しい以前、私が楽しく思ったのは、このひとときだった。そのとき私を待ち受けていたものは、相変わらず、夢も見ない、軽やかな眠りだった。」と描いている[15]。

ムルソーがほんの一瞬に外の世界に触れた時の描写には、夏の夕暮れの色や匂い、新聞売りやサンドイッチ売りの叫び声、公園の鳥や電車の音、夕方から夜に変わる空の模様がまるで全てが見えたかのように描写されている。ムルソーの刑務所の生活は戦争下の生活であり、その生活から一瞬見えた世界は戦争がない平和な世界で手に入れようとしても手に入らない世界で「不条理」を感じる場面である。現実の世界と対比することで、平和な世界がどれだけ楽しい世界だったのかを読み手側も味わいながら、どれだけ平和が大切なことなのかを認識することができるのではないかと考える。

結局、ムルソーは死刑判決となり、彼の命が救われる見込みなくなった。しかし、ムルソーは絶望の淵にあるにもかかわらず、幸福を感じている様子を「ある意味では私には運があった、ということができる。人間は全く不幸になることはない、とママンはよくいっていた。空が色づいて来るときや、暁のひかりが私の独房にしのび込んで来るとき、ママンの言葉はほんとうだと思った。というのは、足音が聞こえたとしたら、私の心臓は破裂しただろうから。－そんなこんなはあったにせよ、結局のところ、心臓は破裂しなかったし、私はまた二十四時間を手に入れたのだ。」と描いている[16]。監獄の中で死刑囚として自分の死と向き合って過ごすにつれて、話し合うこともなかった亡き両親を理解していくことが読み取れる。

周囲にはムルソーは母親のことを全く考えない息子だと捉えられていたが、ムルソーにとってそれはどうでもよいことであったことは、他人に自分の本心を理解させることに意味があるのではないことを伝えたかったのではないかと推測する。ムルソーとママンとの関係性は他人が入り込めない領域であり、心の奥は誰にも侵入できないこと、戦争では領土が侵入され、人の命や自由さえも奪われるが、心までは奪うことができないことを意味しているのではないかと考察する。

物語の最後にムルソーは「これほど世界を自分に近いものと感じ、自分の兄弟のように感じると、私は、自分が幸福だったし、今もなお幸福であることを悟った。」と心情を表している[17]。白井（2019）は、「多くの場合貧困は、人びとに羨望と不満を植えつける。だがカミュ一家は慎み深く控え目で、なにも羨んだりはしなかった。そして地中海のきらめく風土が彼の救いとなった。」と言及している[18]。

『異邦人』の物語そのものが「不条理」という言葉を彷彿させるものであるが、地中海の海の輝きの中に、人の幸福が感じられるこ

とやムルソーが自分の置かれた環境を受け止め、決して人を羨ましがったりせずに牢獄生活を送っているところからも、カミュの育った家庭環境や地中海の風土を垣間見ることができるのではないかと推察する。

6．おわりに

『嵐が丘』の物語の中心人物であるヒースクリフは貧困状況の捨子であったことは、上流階級のアーンショウ家にもらわれても、下流階級であることを切り離すことはできない現実が待ち受けていた。このことは、ヴィクトリア朝時代のイギリス社会に渦巻いていた現実と重ね合わせることができる。

白井（2020）は、『嵐が丘』は入り子式の語りの構造をもっていることが大きな特徴であることを示している[19]。『嵐が丘』の小説は、語りのスタイルと構成の魅力がある小説であることがわかる。物語の構成は乳母のネリーが旅人であるロックウッドに語るスタイルで、問題視された反面、斬新さや面白さも持ち合わせていると言えるだろう。人々にとってやはり小説を読むということ自体が楽しみであったヴィクトリア朝時代にこのように様々な要素を併せ持つ『嵐が丘』の小説は、ヴィクトリア朝文学において、その時代の人々を反映させた作品として大きな意義があるのではないかと考える。

横山（2021）は「カミュが『異邦人』などで描き出した不条理とは、要約すれば、人間が日々の生活の慣習や惰性に流されず、明晰な意識で世界と向き合おうとする時に抱かれる、非合理な世界との断絶の意識であると言えよう。そしてカミュにおける反抗とは、個の不条理を自殺や宗教によって回避せず、自身で受け止めて生きる姿勢と行為を意味する。」と示唆している[20]。饗庭（2020）は、「カミュは『生への絶望なくして生への愛はない』と語っているがそれをつねに行為と文学の間でつかみとろうとした。」と言及している[21]。

20世紀は二つの世界大戦が勃発し、常に苦悩や不安に晒されていた時代でもあったが、自分の死を直面せざるを得ない状況に置かれても、幸福を感じることができること、そして、人間はどんなに絶望に駆られていても、生きるという希望もあることをカミュは『異邦人』の物語を通して、人々に伝えたかったのではないかと考える。

引用文献

1）石塚久郎（編）（2014）．『イギリス文学入門』三修社，p.162.

2）関裕三郎（2000）．『作品が語るイギリス文学史』開拓社，p.157.

3）横山安由美・朝比奈美和子編著（2021）．『はじめて学ぶ フランス文学史』ミネルヴァ書房, p.252.

4）饗庭孝男他（2020）．『新版フランス文学史』白水社.

5）前掲書１，p.164.

6）前掲書１，p.163.

7）鴻巣有希子（訳）（2001）．エミリー・ブロンテ著『嵐が丘』新潮社，p.698.

8）西脇順三郎（1977）．『近世英文学史』慶應義塾大学出版会，p.108.

9）神山妙子（2020）．『はじめて学ぶイギリス文学史』ミネルヴァ書房，p.184.

10）前掲書７，p.169.

11）前掲書４，p.291.

12）前掲書４，p.297.

13）カミュ（訳）窪田啓作（2019）．『異邦人』新潮社，p.6.

14）前掲書13，p.97.

15）前掲書13，p.123-124.

16）前掲書13，p.143.

17）前掲書13，p.156.
18）白井浩司（2019）.「解説」カミュ（訳）窪田啓作（2019）.『異邦人』新潮社，p.161.
19）白井義昭（2020）.『読んで愉しむイギリス文学史入門』横浜市立大学学術研究会，p.88.
20）前掲書３，p.298.
21）前掲書４，p.291.